

日語能動型「tearu」之功能： 與「teoku」之比較分析

劉怡伶

東吳大學日本語文學系 副教授

摘要

本研究目的在記述能動型「tearu」用法特徵。日語補助動詞「tearu」含能動型及受動型兩用法，其中能動型用法學習較不易，先行研究之說明亦有缺失。為改善記述，本研究首先分析其先行動詞特徵，觀察到以下3點：1)能動型用法亦極少與自動詞共起、2)傳達動詞與能動型用法共起頻繁、3)配置動詞亦與能動型用法共起。

其次，本研究運用工藤(1996)的概念，分析能動型用法之篇章功能，發現與表完了時態之「teiru」相同，具備表〈時間退後性〉功能。

本研究亦關注其人稱使用限制，分析能動型用法話者扮演之角色，了解到能動型用法不僅傳達動作結果具有效性，亦顯示話者擔負確定情報之態度。本研究指出分析其篇章功能及言語功能，可區別具類似語意之「teoku」用法，有助掌握能動型用法特徵。

關鍵詞：補助動詞、言語功能、篇章功能、時態、語料庫

受理日期：2016.09.03

通過日期：2016.10.14

**The Active Use of “Tearu”:
A Comparison of the Function between “Tearu” and
“Teoku”**

Liu, Yiling

Associate Professor, Department of Japanese Language and Culture,
Soochow University

Abstract

The purpose of this paper is to describe the active use of Japanese auxiliary verb “tearu”. There are two uses of “tearu”, one is the active use and the other is the passive use. To compare with the passive use, the active use is more difficult to learners, and we do not know much about this use. In this paper, I used corpus to analyze the feature of the cooccurrence verbs and I found that: 1) Intransitive Verbs rarely co-occur with the active use of “tearu”. 2) Reporting Verbs often co-occur with the active use of “tearu”. 3) The space occupying verbs is more co-occur with the passive use.

In this paper, I also analyzed the text function of the active use of “tearu”. I found that it has the function to express “anti-time ordering” and that is the same with “teiru” which is used to express perfective aspect.

Furthermore, I investigated the role of the speaker of the active use of “tearu” and I pointed out that we can tell the difference between the use of “teoku” and “tearu” through observation the personal restriction.

Keywords: auxiliary, speech function, text function, aspect, corpus

能動型「てある」の機能 —「ておく」との比較を通して—

劉怡伶

東呉大学日本語文学科 副教授

要旨

本稿では、能動型「てある」の特徴を記述することを目的とする。「てある」には能動型と受動型の用法があるが、受動型と比べて能動型の用法は学習者に難しく、先行研究の記述にも不十分な点がある。先行研究の記述を改善するために本稿ではまず前接動詞の特徴を調査した。その結果、1) 能動型でも前接動詞が自動詞の場合は極めて少ない、2) 伝達動詞は能動型として用いやすい、3) 配置動詞は受動型として用いやすいが、能動型としても用いられる、との3点が明らかになった。

また、工藤(1996)の概念に基づき、能動型のテクスト的機能を考察したが、パーフェクト相を表す「ている」と同様に、能動型「てある」はテクストにおいて、〈一時的後退性〉を表す機能を果たすことが明らかになった。

更に、本稿では人称制限に注目し、能動型「てある」の話し手の役割を分析したが、能動型「てある」は、行為の結果が有効であるという情報を提示すると同時に、前述の情報を自ら確認しているという話し手の態度を示していることを指摘した。本稿のように、能動型のテクスト的機能及び発話機能を分析することにより、能動型「てある」の特徴が捉えられるだけでなく、意味的に類似している「ておく」と区別できることを示した。

キーワード：補助動詞、発話機能、テクスト的機能、アスペクト、コーパス

能動型「てある」の機能 —「ておく」との比較を通して—

劉怡伶

東呉大学日本語学科 副教授

1. はじめに

日本語の補助動詞「てある」の用法は統語的特徴により二つに大別できる。一つは(1)のように、動作主が抑制され、対象が「が」格をとるのが特徴の用法で、もう一つは(2)のように、動作主の出現が可能で、対象が「を」格をとる用法である¹。

(1) その裏にこの詩が書いてある。 (『筑波ウェブコーパス』)

(2) 色々と宿題と言うか検討する事項を言っております。

(『筑波ウェブコーパス』)

台湾日本語教育學報第27号

典型的には(1)の「てある」は行為の結果の現存、(2)の「てある」は行為の結果の有効性を表すものである²。

益岡(1987)の指摘のように、(1)の「てある」は(2)の用法と異なり、対象が「が」格をとる点で受動表現と共通する面がある。本稿では益岡に従い、(1)の用法を受動型、(2)の用法を能動型と呼ぶ。

本稿で注目するのは、能動型の用法であるが、その理由は二つある。一つは、『学習者による作文とその対訳データベース』を調査した中俣(2011)で明らかになったように、能動型は日本語学習者にとって難しく、受動型と比べて誤用が多いためである³。

もう一つは、能動型「てある」に関する先行研究の記述が不十分で検討する余地があるからである。

¹ 益岡(1984、1987)、森田(1989)、杉村(1996)などを参照のこと。

² 両用法は意味的に連続的なものとして捉えられる。詳しくは2節で述べる。

³ 中俣(2011)では、本稿で言う「能動型」を「有効性保持型」と呼んでいる。

例えば、先行研究ではどのような動詞が能動型「である」と共起しやすいかは説明されていない。

また、多くの先行研究では類似した用法がある「である」と「ておく」とを比較分析しているが、その相違については必ずしも正確に捉えているとは言えない。両表現の用法が類似していることは益岡(1992)の挙げた次の例から窺える。

(3) 一切符を手配しておきました。

—へえ、もう手配してあるんですか。(益岡 1992 の例 43)

能動型「である」と「ておく」との相違について、先行研究の殆どは「行為 - 結果」の流れの中で捉え、前者は行為の結果、後者は結果をもたらす行為に焦点を当てる表現であるとしている(高橋 1976、益岡 1992、山崎 1996、杉村 2003、金水 2000、2009、張 2010、山森 2010、中俣 2011 など)。

しかし、能動型「である」は、伝達の焦点が行為の結果にあるとすれば、行為そのものに焦点を当てる「ておく」と共起できないはずであるが、(4)のように「である」と「ておく」は共起可能である。先行研究の記述を見直す必要があると言える⁴。

(4) (略)今回はそれとは違う計算をするので、この段階ではまだ念のために残しておいてある。

(『筑波ウェブコーパス』)

(3)をもう一度見ると、学習者に必要なのは、このような対話において能動型「である」(または「ておく」)を用いることによりどのような伝達効果が生じるかということと考えられる。能動型「てあ

⁴ 査読者から指摘されたとおり「ておく」に複数の用法があり、能動型「である」との相違を論じる際に「ておく」の用法間の違いを考える必要がある。筆者は現在まだこの問題を検討する余裕がないので今後の課題にしたい。

る」の特徴を説明する際にその発話機能⁵を説明する必要があると言える。更に、次の例を見よう。(5)では「てある」を「ておく」に置き換えると許容度が下がる。

- (5) いつもここのサーモンがおいしいのに結構感動してるんだ。
しかも、ねたに切れ目を筋状に入れ{てある/*ておく/?て
おいた}。 (『筑波ウェブコーパス』)

「てある」は状態表現で「ておく」は動態表現なので、両表現のテンス・アスペクト的意味が異なる⁶。(5)の「てある」を「ておく」に置き換えられない理由を説明するためにそのテンス・アスペクト的意味の相違を考える必要がある。

工藤(1995)では「る(た)」「ている(ていた)」のテンス・アスペクト的意味を記述し、それぞれのテキスト的機能⁷を論じている。本稿では、同様にアスペクト形式である「てある」のテキスト的機能を記述することにより「ておく」と区別できると考える。

そこで、本稿では能動型「てある」の特徴を記述することを目的とする。特にその発話機能とテキスト的機能について「ておく」と比較しながら分析する。

本稿の以下の構成は次の通りである。2節では本稿の立場と考察範囲を述べる。3節では先行研究をまとめる。4節では使用実態を考察する。5節ではテキスト的機能を述べる。6節では発話機能を

⁵ 本稿でいう発話機能は山岡(2000)に従い、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの」で、文の命題内容によって決定される文形式そのものの機能的意味と対照的なものである。

⁶ 例えば、テンス的には、状態表現である「てある」の「る」形は<現在>と<未来>を表すが、動態表現である「ておく」の「る」形は<未来>を表す。
(i) タクシーを呼んである。<現在>
(ii) 明日の9時にタクシーを呼んである。<未来>
(iii) 明日までに片付けておく。<未来>

⁷ 工藤(1995)では、テキストについて次のように規定している。即ち、話し手(書き手)による現実の使用の中にある文の有機的結合であるということである。また工藤では、テキストを構成する複数の出来事の時間的順序性を表す機能をテキスト的機能と呼んでいる。

述べる。7節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 本稿の立場と考察範囲

前述のように「てある」は統語的特徴により能動型と受動型に大別できるが、意味的には、能動型のうち受動型に近いものもある。

例えば、益岡(1987)の指摘のように、動作主が現れている(6)では、能動型「てある」の用法ではあるが、対象の状態の存続を問題としているので、意味的に受動型と類似している。

- (6) 大使館員の話では、古河健志は荷物も所持金も一切をレイクサンドのホテルに残してあったという。

(益岡 1987 の例 28)

本稿では、統語的に能動型と受動型の二つに大別できる「てある」は、意味領域において軸の両極にある二つの典型的な用法とその中間に位置づけられる用法とがあり、全体的に一つの連続体を構成していると考えられる。この立場は益岡(1984、1987、1992)、杉村(1996)、金水(2000)などと同様である。

ただ(6)のような「てある」は、典型的な能動型ではないが、本稿で注目する発話機能及びテクスト的機能を同様に有するので、本稿では典型的な能動型と区別せず同じものとして扱う。

3. 先行研究

3.1 能動型「てある」に関する先行研究

能動型「てある」に関する先行研究は西尾(1964)、高橋(1976)、野村(1983)、寺村(1984)、益岡(1984、1987、1992)、森田(1989)、杉村(1996)、金水(2000、2009)、中俣(2011)、高見・久野(2014)などがある。その統語的・意味的特徴については特に、1) 有効性、2) 意図性、3) アスペクト的意味、4) 人称制限、の4点がよく取り上げられているので、次にまとめておく。

1) 有効性

前述のように能動型「である」は、基本的に行為の結果の有効性を表すものである(益岡 1984、1987、1992、杉村 1996、中俣 2011 など)。例えば、(7)(8)では「である」は発話時において行為の結果の有効性がまだ残存していることを表している。

(7) この日の試合のため体を鍛えてある。

(8) プレゼントをもう買ってあります。

2) 意図性

能動型「である」では、行為の結果は何らかの目的でなされた意図的行為によるものである。そのために、受動型と異なり、前接動詞は意志性動作動詞であれば、自動詞でも他動詞でも可能である(高橋 1976、寺村 1984、工藤 1989、森田 1989、杉村 1996、原沢 1998、2005、金水 2009、山森 2010、高見・久野 2014 など)。

(9) その点は十分考えてある。(森田 1989 : 95)

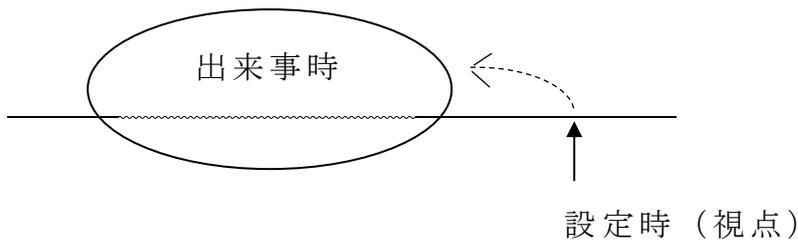
(10) いやっていうほど眠ってあるから、二、三日徹夜しても大丈夫だ。(森田 1989 : 95)

3) アスペクト的意味

能動型「である」は基本的にはパーフェクト相、つまりある設定された時点において、それよりも前に実現した動作がひきつづき関わり、効力をもっていることを表す(工藤 1989、1995、益岡 2000、金水 2000)。

金水(2000)の説明のように、パーフェクト相と視点(設定時)との関係は次のように捉えられる。即ち、パーフェクト相は、視点が出来事時から離れることによって出来事を丸ごと捉えることが可能になるということである。

(11)



(金水 2000 : 38)

工藤(1989、1995)では現代日本語の最も基本的なアスペクトの対立は「る(た)ーている(ていた)」によって表現されるとしているのに対し、益岡(2000)では日本語のアスペクト体系を「る(た)ーている(ていた)／てある(てあった)」という形に拡張すべきと指摘している。本稿では益岡と同じ立場である⁸。

工藤(1995)ではアスペクト形式とそのテクスト的機能を論じているが、「る(た)ーている(ていた)」を中心に分析しており、「てある」についての言及はない。本稿では、日本語のアスペクト体系を理解するためにも、能動型「である」のアスペクト的意味とそのテクスト的機能を考察する必要があると考える。

4) 人称制限

能動型では、前接動詞の表す動作主は話し手(疑問文の場合は聞き手)となることが多い。例えば、金水(2000)の指摘のように、言い切りの主節では動作主は二、三人称者の場合、特定の文法的な手段や文脈的な条件がなければ、能動型「である」は用いにくい。

(12) ?田中さんは試験勉強を十分してある。

(金水 2000 の例 133a)

(13) 田中さんは試験勉強を十分してあるらしい。

(金水 2000 の例 133b)

⁸ その理由について詳しくは益岡(2000)を参照。

また、話し手が行為の結果の有効性を把握できる立場にあれば、動作主は三人称者の場合にも能動型「てある」の使用が可能である(寺村 1984、杉村 1996、金水 2000、高見・久野 2014 など)。

(14) 彼はうちの娘にネックレスを {*もらってある／*くれてある}。
(杉村 1996 の例 43)

(15) うちの娘は彼にネックレスをもらってある。
(杉村 1996 の例 45)

能動型「てある」は、前述のような人称制限があるのは次の理由による。即ち、この用法で問題としている行為の結果の有効性は抽象的なものなので、それが把握できるのは話し手自身が動作主の場合が多い、というためである(寺村 1984、森田 1989、益岡 1987、1992、杉村 1996、金水 2000、高見・久野 2014 など)。

以上、先行研究をまとめた。前述のように、本稿では特に能動型「てある」の発話機能及びテクスト的機能に注目するが、それは上記の 3) アスペクト的意味と、4) 人称制限の 2 点に関わる。詳しくは 5、6 節で述べる。

3.2 「ておく」に関する先行研究

「ておく」は、動作主が動作の結果や影響を意図してその行為を行うことを表す表現である(佐藤 2015)⁹。能動型「てある」と意味的に類似しているので、両表現を比較した先行研究が多い(工藤 1989、山崎 1996、杉村 2003、山本 2005、金水 2000、2009、張 2010、山森 2010、中俣 2011 など)。紙幅の関係で、以下本稿で特に注目するアスペクト的意味及び人称制限に関する記述だけ見る。ほかの先行研究の記述は本稿の関連する考察の中で説明する。

⁹ 「ておく」は「じゃあ、一応出しておきます」のように意図性が低い場合もあるが、工藤(1989)の指摘のように、この場合でも「すくなくとも悪い結果にはならないように、まだしもよさそうだから」ともいうもくろみ性(意図性)が残されると考えられる。

1) アスペクトの意味

先行研究では「ておく」をアスペクト形式として位置づけるべきかどうかで二つの立場に分かれる。

例えば、アスペクト形式として扱う工藤(1989)では、(16)(17)を比較し、「ておく」は動作結果の達成だけでなく、その持続性も表すので、パーフェクト相、つまり<動作+その結果、効力>を表す形式として見なせるとしている。高橋(1976)、吉川(1976)、金水(2000)なども同じ立場である。

(16) お母さんは窓を開けた。(工藤 1989)

(17) お母さんは窓を開けておいた。(工藤 1989)

また工藤(1989)では、能動型「てある」も<動作+その結果、効力>を表す点で「ておく」と共通していると述べている¹⁰。

(18) お母さんは窓を開けてある。

一方、笠松(1993)、佐藤(2015)などでは「ておく」は日本語のアスペクト形式ではないと指摘している。

例えば、佐藤(2015)では、受動型「てある」と「ておく」を比較し、シールが壁に貼られた状態にあるのを見た場合「ておく」が用いられないと説明し、「ておく」は「動詞の示す動きの展開を表すものとは考えにくい」と述べている。

(19) シールを貼っておく。(佐藤 2015 の注 2)

(20) シールが貼ってある。(佐藤 2015 の注 2)

また、佐藤(2015)では「ておく」の「た」形(「ておいた」)は、

¹⁰ (18)は筆者によるもの。以下出典の明示のない用例は筆者の作例である。

単に過去に行為の遂行を表すものと述べている。

(21) シールを貼っておいた。(佐藤 2015 の注 2)

本稿では笠松(1993)、佐藤(2015)と同様に「ておく」はアスペクト形式ではないと考える。その理由は、「ておく」は動態表現である以上、その「る」形は、状態表現の「ている」「である」と異なり、未来の動きを表すものとなり、発話時の動きの局面（動作の過程または動作実現後の結果状態）に焦点を当てることができない、言い換えれば、動きの局面を問題にするアスペクト的意味が派生することは難しいと考えられるからである。

また、先行研究では「ておく」のアスペクト的意味を指摘しているが、本稿ではその意味について次のように考える。即ち、「ておく」はアスペクト的意味が読み取れることもあるが、それは固有の意味ではなく、文脈によるもの、つまり語用論的意味であるということである。本稿では「ておく」はあくまでも動作主が動作の結果や影響を意図してその行為を行うことを表すもので、能動型「である」と異なり、動作の結果（効力）が基準時において実際持続していることまで含意しないと考える。

例えば、(22)では動作の結果（効力）が現在、持続していると解釈でき、一見(23)の「である」と同様にアスペクト的意味（つまり、発話時において行為の結果の有効性がまだ残存していること）を表しているように思われる¹¹。

(22) パンを買っておいた。

(23) パンを買ってある。

しかし、(22)で読み取った「動作の結果（効力）が現在、持続し

¹¹ 金水(2000)では(22)のような「ておいた」は「パーフェクト現在」を表しているとしている。

ている」という意味は文脈によってキャンセルできるものである。それは、次のように「動作の結果（効力）が現在、持続している」と解釈できない状況にも「ておく」が使用可能なことから分かる¹²。

(24) パンを買っておいたけど、すぐ食べられちゃった。

(25) ?パンを買ってあるけど、すぐ食べられちゃった。

(24)(25)から、能動型「てある」はパーフェクトの意味を固有の意味として内包する点で「ておく」と区別できると言える。

2) 人称制限

「ておく」では動作主は基本的に一人称者（話し手）に限られる（山崎 1996、益岡 1992、金 2000、許 2007 など）。

(26) ? 鈴木さんは切符を手配しておきました。
台湾日語教育學報第27号 (益岡 1992 の例 44)

ただ、許(2007)の説明のように、「ておく」は三人称主語の場合に許容されることもあるが、それは三人称者の行為を話し手自身の行為として見なせる場合、つまり、話し手と3人称者が出来事の共同実現者として見なせる場合である。

(27) (太郎と花子と三人で学会に行くことになっている。花子と2人で話している間、花子から「私たち、どこに泊まるの?」と聞かれて)
「部屋なら、太郎がもう取っておいたよ。」

¹² なお、(25)では「てある」を「てあった」に置き換えると自然になるが、それは「てあった」は「てある」と異なり、「動作の結果（効力）が現在、持続している」という意味がないからである。

「ておく」の人称制限の理由は次のように考えられる。即ち「ておく」は動作主が動作の結果や影響を意図してその行為を行う表現であるが、本人でなければ動作主の意図まで把握することは難しいと考えられるからである(益岡 1992)。

以上「ておく」のアスペクト的意味及び人称制限について見た。

4. 使用実態

4.1 調査

本節では、まず能動型と共起しやすい前接動詞を考察する。大規模な調査を行うために『筑波ウェブコーパス』(Tsukuba Web Corpus、略称 TWC) を利用した。『筑波ウェブコーパス』から、情報を一方的に伝達する文章だけでなく、相手とのやり取りのある場面における能動型「てある」のデータも入手可能であると考えられるからである¹⁴。調査の手順は次の通りである。

1) 「動詞+てある」のパターンを抽出する作業

まず、コーパス検索システム「NINJAL-LWP for Tsukuba Web Corpus」¹⁵を利用して『筑波ウェブコーパス』から「動詞+てある」のパターンを入手し、出現頻度順上位 100 を抽出する¹⁶。ただ、こうして入手

¹³ 許(2007)では「ておく」と韓国語の表現とを比較しているため、韓国語の表現も取り上げているが、本稿では韓国語を検討しないので、韓国語の表現を省略した。

¹⁴ コーパスを利用して調査を行う際にデータの均衡性と代表性を考慮する必要がある。『書き言葉均衡コーパス』(略称 BCCWJ) は、大規模なものではあるが、書き言葉を中心としたもののため、能動型の使用実態の調査データとして利用した場合、偏った結果が出る可能性がある。そのために本稿では、前接動詞の調査に『BCCWJ』を利用しないことにした。しかし『BCCWJ』は長い文脈を観察しやすいという利点があり、本稿ではテキスト的機能を考察する時に使用した。本稿では『BCCWJ』の例も引用しているのはそのためである。

¹⁵ 『NINJAL-LWP for TWC』(<http://corpus.tsukuba.ac.jp>) は筑波大学、国立国語研究所、Lago 言語研究所が共同開発し、ウェブ上に公開しているコーパス検索システムである。

¹⁶ 検索の方法は次の通りである。まず、動詞「ある」を検索語として検索し

した「動詞＋てある」のパターンに考察対象外のものや正しく解析されていないものが含まれるので、抽出したパターンを更に人手修正した¹⁷。その結果、86種の「動詞＋てある」のパターンが確認できた（附録1を参照）。

2) 能動型と受動型に仕分ける作業

次は、1)の作業から得た「動詞＋てある」のパターンを能動型と受動型に仕分ける作業である。ここでは先行研究を参考に分類の基準を(28)のように設定した。

(28) 「てある」用法の分類基準：

a. 能動型：

①前接動詞は自動詞のもの。

②前節動詞は動作の対象が「を」格を取るもの。

b. 受動型：

前接動詞は動作の対象が「が」格を取るもの。

前述のように入手した「動詞＋てある」を含む用例のうち、動作の対象が文中に現れていないものや、動作の対象が「は」「も」など「が」「を」以外の格で示されているものもある¹⁸。これらの例はどちらの用法か判定しにくいので、用法の出現頻度として加算しない。

たら検索欄に「ある-非自立」の形式が出てくるが、この形式を選んで更にこの形式の中の「動詞＋てある」のパターンを指定すれば「てある」と共起する前接動詞のリスト及びその実例が入手できる。

¹⁷ 例えば、「愛は心に置かれてあるモノ」のように「動詞受身形＋てある」は本稿の考察対象ではない。また、「往々にしてある」は「動詞＋てある」のパターンではないが、正しく解析されていないためリストに入っていた。「コピーはとってあるぜ」「廊下を広く取ってあります」などは、同じ動詞にも関わらず、表記が異なるため、間違って異なるものとして処理されているものもある。これらの問題はすべて人手修正した。

¹⁸ 例えば、(i)では動作の対象は文中に現れていない。(ii)では動作の対象が「も」格をとっている。

(i) どこかに、書いてありますか？(『筑波ウェブコーパス』)

(ii) テーブル番号も書いてあります。(『筑波ウェブコーパス』)

このように調査した結果をまとめると表1と表2になる。

表1は、「動詞＋てある」のパターンのうち動作の対象が「を」格をとる動詞の頻度順上位25までのもの、つまり能動型として用いやすい頻度順上位25までのものである。一方、表2は動作の対象が「を」格をとる動詞の頻度順下位25までのもの、つまり能動型より受動型として用いやすい頻度順上位25までのものである。

なお、表1と表2のうち、斜線の前は動作の対象を「を」格で示している例の頻度で、斜線の後は動作の対象を「が」または「を」格で示している例の頻度の合計である。括弧()の中はそのパーセンテージを示している。

表1 能動型として用いやすい「動詞＋てある」

伝えてある:102/102(100%)、言っている:27/28(96.43%)、買ってある:38/42(90.48%)、作成してある:39/46(84.78%)、考えてある:36/43(83.72%)、仕上げている:8/10(80%)、決めてある:61/78(78.21%)、加えている:94/121(77.69%)、まとめている:431/558(77.24%)、変えている:62/82(75.61%)、囲っている:18/24(75%)、預けている:18/24(75%)、出している:52/70(74.29%)、残している:89/120(74.17%)、工夫している:24/34(70.59%)、紹介している:107/155(69.03%)、入れている:438/635(68.98%)、示している:214/311(68.81%)、分けている:60/88(68.18%)、解説している:111/165(67.27%)、掲載している:120/180(66.67%)、記述している:42/63(66.67%)、合わせてある:39/59(66.10%)、取っている:214/330(64.85%)、説明している:128/205(62.44%)

表2 受動型として用いやすい「動詞＋てある」

挟んである:24/99(24.24%)、展示してある:135/573(23.56%)、巻いてある:44/187(23.53%)、打っている:34/150(22.67%)、設
--

置してある：172/759 (22.66%)、備えてある：32/145 (22.07%)、切つてある：39/187 (20.86%)、塗ってある：40/210 (19.05%)、引いてある：58/323 (17.96%)、描いてある：90/532 (16.92%)、植えてある：49/309 (15.86%)、印刷してある：9/59 (15.25%)、放置してある：6/40 (15%)、彫ってある：17/116 (14.66%)、敷いてある：41/321 (12.77%)、積んである：31/251 (12.35%)、押してある：12/117 (10.26%)、捨ててある：10/107 (9.35%)、干してある：14/157 (8.92%)、貼ってある：203/2434 (8.34%)、置いてある：241/2953 (8.16%)、備え付けてある：12/138 (8.10%)、添えてある：8/104 (7.69%)、飾ってある：39/733 (5.32%)、書いてある：57/1080 (5.28%)

4.2 考察

以下、附録 1 及び表 1、表 2 から得られる情報を確認する。

1) 能動型でも前接動詞が自動詞の場合は極めて少ない。

先行研究では能動型は受動型と異なり、自動詞と共起すると指摘しているが、附録 1 のように「自動詞＋てある」のパターンはない。能動型は自動詞と共起できるものの、他動詞と比べて断然少ないと言える。

2) 伝達動詞は能動型として用いやすい。

表 1 のように、最も能動型として用いやすい動詞は「伝える」である¹⁹。また同じく伝達動詞の「言う」「紹介する」「示す」「解説する」「説明する」も上位 25 位にランキングしている。一方、表 2 のように受動型として用いやすい「動詞＋てある」に伝達動詞はない。伝達動詞は能動型として用いやすいと言える。

¹⁹ 表 1 から分かるように『TWC』において動詞の対象を明示している「伝達してある」ではすべて「を」格をとっており、その割合は能動型として用いやすい「動詞＋てある」のパターンの中で最も高いのである。

3) 配置動詞²⁰は受動型として用いやすいが、能動型としても用いられる。

益岡(1987)では受動型では前接動詞は配置動詞が中心となると述べている。また能動型のうち、受動型に近いものもあることも指摘している。表2から受動型では配置動詞が多いこと、また表1から配置動詞が能動型としても用いられることが確認できる²¹。「配置動詞+能動型「てある」」は対象の状態の存続を問題としており、受動型に近い用法である。本稿の調査結果は益岡の記述を裏付けるものと言える。

注意したいのは次のことである。前述のように、伝達動詞は能動型として用いやすいが、能動型では伝達動詞が中心となっているのではない。受動型と比べて、能動型に前接する動詞のバリエーションが多いことは表1と表2から確認できる。能動型を特徴づけるために前接動詞だけではなく、他の視点からの分析が必要と言える。次節から機能の観点から能動型の特徴を考察する。

5. テクスト的機能

5.1 アスペクト的意味とテキスト的機能

本節では、能動型「てある」のテキスト的機能を記述する。工藤(1995)を踏まえるものなので、まず工藤の説を見る。

工藤(1995)では、「る(た)」「ている(ていた)」のアスペクト的意味及びそのテキスト的機能を論じている。具体的には、「る(た)」は完成相、「ている(ていた)」は継続相、またはパーフェクト相を表すものである²²。また、それぞれはアスペクト的意味が異なるの

²⁰ 「配置動詞」は益岡(1987)の用語である。益岡によれば、「配置動詞」は「置く」に代表されるもので、「並べる」「飾る」「掛ける」「載せる」「貼る」「敷く」「止める」なども含む。

²¹ 例えば表1の「入れてある」は「配置動詞+てある」のパターンである。
(i) 底には赤玉土を入れてあります。『筑波ウェブコーパス』

²² 工藤(1995)によれば、アスペクト的には「る(た)」は<完成相>、つまり時間の中に現象する運動を、継続性を無視して時間的に限界づけて捉えること

で、異なるテキスト的機能を果たす。

工藤によれば、「る(た)」は、出来事間の<継起性>を表すもの、即ち、時間の流れの中に次々と起こってくる出来事の連鎖の中に一つの出来事を配置する時に用いるものである。

例えば、(29)では「た」は時間の流れの中で三つの出来事が時間順に起こることを表している。

(29) (略)駆け込んできた兵が、血の気の失せた顔で叫んだ。そして、「ここにも敵がくるぞ、火炎放射器でやられるぞ」と言った。住民も兵も、おびえたように立ち上がった。

(工藤 1996 : 65 の例を改編²³)

また、「ている(ていた)」(結果の持続を表す場合)については、工藤では、出来事間の<同時性>、即ち複数の出来事が時間的に共存することを述べる時に用いるものであると述べている。

例えば(30)では「ていた」は「どこに行っていた」ことと「3度電話した」こととは時間的に重なっていることを表している。

(30) どこに行っていた。3度も電話したのよ。

(工藤 1996 : 65)

一方、「ている(ていた)」(パーフェクトを表す場合)については、工藤では<一時的後退性>を表すもの、つまり基準時において効力を持つ先行する出来事を導入する時に用いるものであると述べている。例えば(31)では、破線部では話し手の判断を述べているが、その判断の理由・根拠を説明するために、後続文では時間的に先行する出来事を「ている」で取り上げている。

を表すもの、一方「ている(ていた)」は基本的に<継続相>、つまり時間的限界を無視して継続的に捉えることを表すものである。

²³ 紙幅の関係で例文の一部を省略した。また下線は工藤のもの(例 30、31 も同様)。

(31) ヴィルヘルム・フルトヴェングラーは途方もなく純粋人間であった。この純粋さは、芸術の神聖さを信じ、これをどこまでも貫こうとする彼の徹な心情にも繋がる。1937年の夏ザルツブルグにおいて、彼はトスカニーニの「ナチの国で指揮する者はすべてナチだ」と決めつける攻撃に対し、毅然として「芸術は政治に支配されない」と反駁している。

(工藤 1996 : 116)

以上のように、「る (た)」「ている (ていた)」はテキストを構成する出来事間の時間関係を示すことができるので、工藤の指摘のようにテキスト的機能を果たすものと言える。

5.2 能動型「てある」のテキスト的機能

本節では、工藤(1996)の概念に基づき、能動型「てある」のテキスト的機能を分析する。結論から言うと、能動型「てある」は、同じくパーフェクトを表す「ている」と同様に、＜一時的後退性＞を表す機能を持つものである。

例えば、(32)(33)では、先行文の表す出来事に継続して、後続文の表す出来事が起こることを表しているのではない。

(32) いつもここのサーモンがおいしいのに結構感動してるんだ。
しかも、ねたに切れ目を筋状に入れてある。

(『筑波ウェブコーパス』)

(33) 扉内部にはTV・パソコン・ワインセラーが収納できるようになっています。配線ルート・通気などに注意して納まりを考えてあります。

(『筑波ウェブコーパス』)

(32)(33)では、話し手は眼前の事態を述べた上で、発話時に効力を持つ、先行する出来事を「てある」で導入している。この場合「て

ある」は、工藤(1996)でいう<一時的後退性>を表す機能を果たしていると言える。一方、「ておく」の「る(た)」形は<継起性>を表す機能がある。(34)(35)では、複数の出来事が時間順に並べられている(下線は筆者による)。

- (34) 彼は手にしていたカードを捨て、テーブルの上のと混ぜて、よくシャッフルした。それをテーブルにおくと、私に一枚渡し、自分も一枚とって、テーブルに伏せておいた。「ゲームを面白くするためにこれにチップをかける。いいかね、たとえば…」と彼はポケットから小銭をつまみ出して、じゃらじゃらと、テーブルに置いた。

(山田度(1987)『多様な豊かさ』/『BCCWJ』)

- (35) あまりにも痛かったので、昨日はパソコン作業をしようと思っていたのに、キーボードを打つのも嫌になるくらい痛くて、結局ダメだった。応急処置としてワセリンを塗り、バンドエードを貼っておいた。朝・・・まだ痛みがあるけど、昨日より、多少、多少なのだがマシになった。

(Yahoo!ブログ/『BCCWJ』)

次のように、上記の例では「ておく」を「てある」に置き換えられない。ここから能動型「てある」は「ておく」と異なり、<継続性>を表す機能がないことが分かる。

- (36) 彼は手にしていたカードを捨て、テーブルの上のと混ぜて、よくシャッフルした。それをテーブルにおくと、私に一枚渡し、自分も一枚とって、テーブルに伏せ { *てある / *てあった }。「ゲームを面白くするためにこれにチップをかける。いいかね、たとえば…」と彼はポケットから小銭をつまみ出して、じゃらじゃらと、テーブルに置いた。
- (37) あまりにも痛かったので、昨日はパソコン作業をしよう

思っていたのに、キーボードを打つのも嫌になるくらい痛くて、結局ダメだった。応急処置としてワセリンを塗り、バンドエードを貼っ{*てある/*てあった}。朝・・・まだ痛みがあるけど、昨日より、多少、多少なのだがマシになった。

前述のように、「ておく」は文脈によりパーフェクト相を表すこともある。例えば、(38)では「ておく」はパーフェクト相、つまり「早退する旨を主任に伝える」ことが既に実現していることを表していると解釈できる(下線は筆者による)。

- (38) 社員食堂で手早く昼食をとり、そのまま車で都心方面へ向かった。主任の西野という男に、急用ができたので早退する旨を伝えておいた。

(梶悟郎 1995『ヴィーナス・シティ』/『BCCWJ』)
台湾日語教育學報第27号

(38)では「ておく」は「都心方面へ向かった」ことに先行して「早退する旨を伝える」ことが既に実現したことを表しているので、＜一時的後退性＞を表す機能を果たしているとも言える。

次のように、上の例では能動型「ておく」は「てある」に置き換えられる。

- (39) 社員食堂で手早く昼食をとり、そのまま車で都心方面へ向かった。主任の西野という男に、急用ができたので早退する旨を伝えてある。

前述のように能動型「てある」はパーフェクトを表すアスペクト形式で、＜一時的後退性＞を表す機能がある。(39)で「てある」が用いられるのはこのためであると言える。

以上、能動型「てある」のテキスト的機能を見た。本節で明らか

になった両表現のテクスト的機能を(40)にまとめる。

- (40) 能動型「である」は<一時的後退性>を表す機能がある。
一方、「ておく」は基本的に<継続性>を表すが、文脈により<一時的後退性>を表す機能もある。

6. 発話機能

6.1 人称制限と話し手の役割

本節では、能動型の人称制限及び話し手の役割を見る。

能動型「である」と「ておく」を区別するために、両表現の人称制限も考える必要がある。2節で見たように、能動型「である」も「ておく」も人称制限があるが、その内実は一様ではない。その相違を見るために、先行研究の記述をもう一度下にまとめる。

- (41) 能動型「である」の人称制限について
- a. 基本的に動作主は話し手である。
 - b. 但し、話し手が行為の結果の有効性を把握できる立場にあれば、動作主が三人称者の場合にも能動型「である」の使用が可能である。
- (42) 「ておく」の人称制限について
- a. 基本的に動作主は話し手である。
 - b. 但し、三人称者の行為を話し手自身の行為として見なせる場合、つまり話し手と三人称者が共同実現者で見なせる場合にも「ておく」の使用が可能である。

ここで注目したいのは、両表現を用いる時の話し手の役割の違いである。(41)(42)から分かるように、両表現では話し手が重要な役割を果たすが、「である」は極端に言えば、動作主が特定できない場合にも、話し手が行為の結果の有効性が把握できる立場にあれば使用可能である。「である」では、話し手は行為の結果の有効性を把握

する責任者であると言える。一方、「ておく」は、行為を実現したのが話し手の場合、または当の行為を話し手自身の動作として見なせる場合に使用可能なので、話し手は動作を実現した責任者と見なせる。従って、両表現では話し手の役割は次のように考えることができる。

(43) 話し手の役割

- a. 「てある」: 話し手は行為の結果の有効性を把握する責任者である。
- b. 「ておく」: 話し手は動作を実現した責任者である。

能動型「てある」と「ておく」の相違を上記のように記述できることで次の例を説明できる。

前述のように、(32) (下に再掲) では「感動している」ことを述べた後、それに関連づけられる、先行する出来事を「てある」で導入している。前述のように、「ておく」も先を見通して事前に行った行為を述べるものなので、(32)で使用できるはずであるが、この例では「てある」を「ておく (ておいた)」に置き換えられない。

- (44) いつもここのサーモンがおいしいのに結構感動してるんだ。しかも、ねたに切れ目を筋状に入れ {てある / *ておく / ?ておいた}。

(44)で「てある」が使用でき、「ておく (ておいた)」が使用できない理由は次のように考えられる。即ち、(44)は店の客の発話なので、店の客である話し手は「ねたに切れ目を筋状に入れた」行為の結果の有効性 (料理が美味しく作られていること) が把握できる立場にあるが、当の行為を実現した責任者 (調理した者) として見なすことは難しいと考えられるからである。話し手の役割から能動型「てある」と「ておく」の相違を捉えることができると言える。

6.2 能動型「である」の発話機能

本節では、前節の考察を踏まえて能動型の発話機能を見る。

まず、語用論的観点から「ておく」の機能を考察した山本(2005)には興味深い記述がある。

山本(2005)によれば、(45)のような上司に対する返事では「ておく」より「である」や動詞の言い切りの方が適切さが高い。

(45) (会話に必要な資料について A と B が話している。A は B の上司となる。)

A: 資料のコピー、しなくちゃね。

B: あ、コピーなら {??やっておきました／やっております／やりました}。 (山本 2005 の例 30²⁴)

(45)については、山本では、ポライトネス²⁵の観点からの説明が必要であることを指摘している。山本によれば、「ておく」は、動作者の存在は暗示的である「である」と異なり、動作者の存在に注目した表現のため、ポライトネスの観点から見れば、場合によっては「恩着せがましい」表現になる可能性がある。また、「聞き手にも当該の行為をする義務がある状況で話し手のみがその行為をした場合には「ておく」を用いると、聞き手が行為をしていないことを明示してしまうことになる」という。

山本の記述から、「ておく」を分析する際にその伝達効果を考える必要があると言える。ただ山本では「ておく」を記述することを目的としたもののため、能動型「である」についての説明はない。

本稿では、前述のように、発話機能に注目するが、能動型「てあ

²⁴ (45)の適格性の判断は山本(2005)による。

²⁵ 山本(2005)では宇佐美(2002)に従い、ポライトネスを次のように規定している。即ち、ポライトネスは対人的な配慮の結果としての言語行動として、調和の取れた関係を作り出したり、維持したりすると言った、様々な目的を達するために話し手が用いる戦略の一つであると考え、ということである。

る」と「ておく」の発話機能を次のように捉えられると考える。

(46) 能動型「である」の発話機能：

能動型「である」は、行為の結果が有効であるという情報を提示すると同時に、前述した情報を自ら確認しているという話し手の態度を示す。

(47) 「ておく」の発話機能：

「ておく」は、動作主が先を見通して行為を行うという情報を提示すると共に、自分が行為を実現した責任者としても見なせるという話し手の態度を示す。

例えば、(45)について本稿の記述で次のように説明できる。まず(45)で「ておく」を用いる場合は、話し手は自分が行為の責任者であることを強調することになり、結果的に自分の存在感をアピールしているイメージを与える可能性がある。そのため、場合によって「恩着せがましい」と思われることがある。

一方、(45)で動詞の言い切りを用いる場合は、動作主を明示していないが、話し手は動作主であると解釈される。しかし「ておく」の場合と異なり、話し手が行為を実行した責任者であることを強調していないので、悪いイメージをもたらすことはないと思われる。

また(45)で能動型「である」を用いる場合は、行為の結果が有効であることを示していると同時に、行為の結果の有効性を自ら確認しているという話し手の態度を示している。このように(45)で能動型「である」と動詞の言い切りが用いられ、「ておく」が用いられないことは本稿の記述で説明できると言える。

7. まとめ

以上、能動型「である」の特徴を考察した。先行研究では前接動詞や機能についての記述はないが、本稿では特にこれらの特徴を考察した。その結果、前接動詞について、1) 能動型でも前接動詞が自

動詞の場合は極めて少ない、2) 伝達動詞が能動型として用いやすい、3) 配置動詞が受動型として用いやすいが、能動型としても用いられる、との3点が明らかになった。また、本稿では、工藤(1996)の概念に基づき能動型のテクスト的機能を分析したが、能動型「てある」は「ておく」と異なり、＜継続性＞ではなく、＜一時的後退性＞を表す機能があることが明らかになった。更に、本稿では人称制限に注目し、能動型の話し手の役割を分析したが、能動型「てある」は、「ておく」と異なり、行為の結果が有効であるという情報を提示すると同時に、前述した情報を自ら確認しているという話し手の態度を示すことを指摘した。

最後に今後の課題を述べる。本稿では受動型「てある」の用法は考察しなかった。しかし、受動型は能動型と意味的に連続しているので、一般性のある説明ができるように受動型も考察に入れて分析する必要がある。また、「ておく」は複数の用法があるので、どの用法が能動型と接続しているかを考察することにより「ておく」の理解につながると考えられる。これらの問題を今後の課題にしたい。

附録1『TWC』における頻度順上位86種の「動詞＋てある」

- 1) 書いてある(46493)、2) 置いてある(11556)、3) 貼ってある(3779)、4) 設置してある(1789)、5) 用意してある(1621)、6) 記載してある(1427)、7) 飾ってある(1418)、8) 作ってある(1396)、9) まとめてある(1320)、10) 入れてある(1230)、11) 展示してある(1006)、12) 描いてある(944)、13) 記してある(843)、14) 示してある(812)、15) 付けてある(810)、16) 掛けてある(763)、17) 取ってある(752)、18) 設定してある(700)、19) 設けてある(693)、20) 説明してある(692)、21) 表示してある(670)、22) 植えてある(597)、23) 掲載してある(577)、24) 並べてある(568)、25) 載せてある(564)、26) 止めてある(561)、27) 登録してある(553)、28) 積んである(522)、29) 敷いてある(500)、30) 解説してある(493)、31) 伝

えてある(473)、32)明記してある(447)、33)保存してある(445)、34)引いてある(437)、35)備え付けてある(433)、36)取り付けてある(424)、37)施してある(412)、38)掲げてある(411)、39)言っている(402)、40)残してある(369)、41)塗ってある(355)、42)巻いてある(344)、43)切っている(338)、44)備えてある(337)、45)しまっている(330)、46)紹介してある(323)、47)祀っている(319)、48)使っている(295)、49)貼り付けてある(292)、50)干している(288)、51)決めてある(284)、52)述べてある(276)、53)保管してある(275)、54)記述してある(271)、55)分けてある(250)、56)変えてある(248)、57)捨ててある(242)、58)隠している(239)、59)打っている(224)、60)掲示してある(223)、61)定めてある(218)、62)仕上げてある(215)、63)彫っている(211)、64)表記してある(211)、65)添えてある(207)、66)揃えてある(207)、67)考えてある(206)、68)合わせてある(203)、69)囲っている(199)、70)立てである(193)、71)預けてある(184)、72)振っている(183)、73)押している(182)、74)挙げてある(172)、75)出してある(170)、76)記入してある(168)、77)かぶせてある(166)、78)工夫してある(166)、79)放置してある(164)、80)加えてある(160)、81)買っている(159)、82)作成してある(157)、83)配置してある(156)、84)挟んである(154)、85)印刷してある(153)、86)指定してある(149)

参考文献

- 宇佐美まゆみ(2002)「(連載)ポライトネス理論の展開」『言語』31(1-13、6を除く)、大修館書店
- 笠松郁子(1993)「「しておく」を述語にする文」『ことばの科学』6、むぎ書房、pp.117-139
- 金水敏(2000)「時の表現」仁田義雄・益岡隆志編『時・否定と取り立て』岩波書店、pp.3-92
- 金水敏(2009)「意志性・主観性と文脈」由本陽子・岸本秀樹編『語彙の意味と文法』くろしお出版、pp.273-284

- 工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学 3』むぎ書房、pp. 53-118、
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 許宰碩(2007)「日本語の「しておく」について—韓国語の「hae nohada/duda」との対照の観点から」『筑波日本語研究』12、pp. 26-43
- 佐藤琢三(2015)「補助動詞テオク—意味・語用論的特徴と学習者の問題」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版、pp. 1-18
- 杉村泰(1996)「形式と意味の研究—テアル構文の2類型」『日本語教育』91、61-72
- 杉村泰(2003)「テオク構文とテアル構文の非対称性について」『言語文化論集』24-2、pp. 95-110
- 高橋太郎(1976)「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、pp. 119-152
- 高見健一・久野暲(2014)「「～である」構文」『日本語構文の意味と機能を探る』くろしお出版、pp. 1-35
- 張賢善(2010)「「～である」文と「～しておく」文の違いについて—文法構造の観点から—」『言語・地域文化研究』16、pp. 203-213、
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』Ⅱ、くろしお出版
- 中俣尚己(2011)「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究 —「である」と「しておく」を例として—」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房 pp. 215-233
- 西尾寅弥(1964)「テイルとテアル」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝編『講座現代語 6 口語文法の問題点』明治書店、pp. 289-293
- 野村雅昭(1983)「近代語における既然態の表現について」『論集日本

- 語研究 15 現代語』有精堂出版、pp. 152-164
- 原沢伊都夫(1998)「テアル形の意味—テイル形との関係において」
『日本語教育』98、pp. 13-24
- 原沢伊都夫(2005)「テアルの意味分析—意図性の観点から」『日本語
文法』5-1、pp. 20-38
- 益岡隆志(1984)「一である」構文の文法—その概念領域をめぐって」
『言語研究』86、pp. 122-138
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
- 益岡隆志(1992)「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向け
て—」文化言語学編集委員会編『文化言語学—その提言と建設』
pp. 532-546
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版
- 山崎恵(1996)「『～ておく』と『～である』の関連性について」『日
本語教育』88、pp. 13-24
- 山本裕子(2005)「「～ておく」の意味機能について」『名古屋女子大
学紀要(人文・社会編)』51、pp. 207-218
- 山森良枝(2010)「「～である」・「～ておく」の構文について」『神戸言語
学論叢』7、pp. 107-120
- 吉川武時(1976)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦
編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、pp. 157-295